脱マニュアル宣言

中央技術㈱
三　品　智　和

1．はじめに

私は入社以来３年半、河川関係の業務に従事しています。その内容は、従来の行政あるいは技術基準の枠に囚われない新たな試みで、学識経験者の御指導の基に、個々の川の特性を尊重した川づくりを検討しています。また、調査結果の一部は学会において、発表・報告を行ってきました。ここでは、個性が失われつつある日本の川を本来の個性豊かな川に戻すための考え方について、業務を通して得られた経験を基に述べたいと思います。

2．金太郎飴の解消

「金太郎飴」と称して、川の様相がどの川を見ても同じようになってきたように思います。事実、治水・利水の安全度は向上しましたが、その反面それぞれの川の個性が失われてきました。本来我国には、どの国にも引けを取らないほど多様性に富んだ、多くの種類の川が存在し、中には「板東太郎」の異名を持つ利根川など洪水流量が毎秒１万㎥以上の大河も存在する稀少な河川保有国であります。

3．日本の川の魅力

我国を訪れる外国人観光客は年間約480万人います。これは、他の先進国に比べ少なく（１位：フランス、２位：スペイン、３位：アメリカ）、１位フランスの20分の１程度です。フランスは遠く、言葉も通じにくく、まして治安が良いわけでもありません。そこまで犠牲にして行くのには、どこかすばらしい魅力があるに違いないのでしょう。

川について見れば、フランスを代表するセーヌ川は何故か川の代表選手のように言われています。特に個性の強い川というわけではありません。この川の魅力は、橋や護岸が周囲の並木や保存されている街並み等とうまく溶け込んでいるからではないかと思います。つまり、魅力の重点は、川と周囲の文化的で歴史のある景観との調和にあると言えます。

それでは、日本の川はどうでしょう。世界的に見ると、急流河川で砂や砂利が多い日本の川は稀有であり、それらの数が多く、さらに個々の川それぞれに固有の性質を持っています。例えば、東海道新幹線の車窓から見える川だけでも、時間は一瞬ですが、川幅の大きい川・小さい川あるいは砂利の多い川・少ない川とそれぞれに異なり、注意してみれば周辺環境も異なります。このような、個々の川自体に個性を持つ日本の川を世界にアピールすることを望みます。

4．河川がほしがる「脱マニュアル宣言」

いま日本の川を魅力ある川にするために変えなければならないもの、それは技術基準（マニュアル）であると感じています。確かにマニュアルは、河川の調査計画を行う際に無くてはならないもので、基準に従うことで効率的にでき、かつ便利であります。しかしながら、日本の川の全てに同じマニュアルを使用することは、川が単調的になり、簡潔に言うと川の規模が同じならば同じ川になってしまい魅力を損なうように思います。川は本来、多様な自然環境を有している空間で、一つとして同じ川はなく、これが川の個性です。

日本の１級河川が109水系あるならば、109水系分の川づくり手法があっても不思議ではありません。

5．おわりに

現在の業務について、多少ですが個々の川の違いがわかってきたような気がしますが、一つの川についてみれば、その土地土地に昔から住んでいる人には到底及びません。高水流観を行った時など、川を中心に生活する人々（農業・漁業等）は、夜を徹して、川の水位を確認しているのをよく目にします。やはり、過去の災害や洪水時の川の現象を知るには、地元の人たちが詳しく、活きた情報源となります。ここでは、魅力ある川づくりについて、これまでの業務経験を基に述べました。私は魅力ある川づくりに必要なことは、個々の川の特性を知り、さらにその地域の歴史・風土を十分理解し、生かすことが大切であることを実感しました。

最後に業務の御指導を頂いている宇都宮大学名誉教授　河相工学研究堂　須賀如川先生に深く謝意を表します。

略　　歴：三品　智和
1976年　　福島県相馬市生まれ
2001年３月　千葉工業大学大学院卒業
2001年４月　中央技術㈱入社
　　現在に至る
保有資格：技術士補（建設部門）
　　２級技術者（土木学会）
　　２級土木施工管理技士